

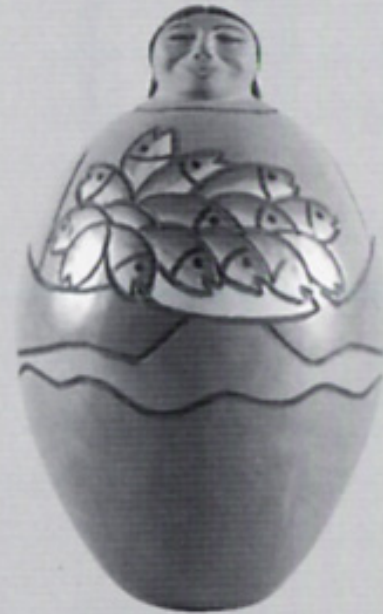
水族がかきたてる想像力

企画展「みんなく水族館」出展作品／チュルカナスの焼きもの(高さ45.6cm、直径28.6cm)、ティンガティンガ絵画(縦61cm、横59cm)、ほか2点

野林 厚志

文化資源研究センター

食物連鎖の頂点に立つ人間にとつて、魚や貝、エビ、カニといった水族は、自然が与えてくれる恵みとして世界中のいたるところで食されてきた。いっぽうで、それぞれの土地の人びとは、自分たちの利用している水族が、どんな色や形をし、どのような能力をもち、どのように活動しているかなどを十分に熟知してきた。人びとは水族を、衣・食・住のなかでただ利用するだけでなく、時には畏敬の念をもって、祈りや



祭りの対象としてきた。このようにして精神面でも人びとを支えてきた水族とのつきあいの様子は、しばしば絵画や造形物のモチーフに使われる。古くは日本の縄文土器に、築(たか)に頭をつっこんだサケと思われる魚の姿が描かれている。また、新しく生まれてきた芸術のなかにも水族と人間とのつきあいが大切なモチーフとなっていることも少なくない。

表紙右側にあるものは、ペルー北部のチュルカナスという場所

つくられた土器である。チュルカナスの焼きものは、今から三〇年ほど前に現地の若い職人が、インカ時代あるいはそれ以前の焼きものの技術を再現したものである。

表紙の背景になっている絵画は、タンザニアのティンガティンガ絵画とよばれるものである。ティンガティンガ絵画は一九六〇年代に、タンザニア南部のトゥンドール地方出身の若者が描いていた動物や植物をモチーフにした



絵から出発したものである。今ではアフリカのポップアートとして有名になっている。

地域を越えて同じ時期に生まれた二つの新しい創造に、人間と魚との関係がモチーフとして使われているのは単なる偶然なのだろうか。明確な理由はすぐには見つけられそうもないが、時代や地域を越えて、水のなかに棲む生物が人間の想像力をかきたててきたことだけは確かである。